

藤原俊成の評語「万葉の古風」について

木村 尚志

はじめに

「万葉の古風」という評語は、現代の古典和歌の注釈や論考でも用いられている。【表1】に示したように歌合の判詞で、個別の和歌について万葉の「古風」を指摘したのは藤原俊成が嚆矢であり、その用例は三八例中七例に上る。一五世紀に至るまでの用例について、本歌となった万葉歌が『万葉集』の写本や抄出書、歌学書にどの程度見えるかを、最下段（欄外）の数字は示している。それによると御子左家による、あるいはそれと関わりが深いと見られる『万葉集』の写本や抄出書のうち、編纂の趣旨の異なる『古来風躰抄』以外には四五・五%から六一・一%の歌が見えるのに対し、清輔の『和歌初学抄』『古歌詞』、及び「万葉集

所名」に見えるのは二二・二%と低い。この事実を念頭に置きつつ、「古風」という評語と、御子左家の万葉撰取に対する姿勢の関わりについて論じてみたい。なお、『万葉集』は広瀬本を底本とする。欠脱箇所は『類聚古集』等で補う。

一 俊成の「古風」

俊成は仁安元年（一一六六）の『中宮亮重家朝臣歌合』で「万葉之歌風」（八番・雪、嘉応二年（一一七〇）の『住吉社歌合』で「万葉の風体」（九番・旅宿時雨）と万葉撰取歌を評した。前者は否定的、後者は肯定的評価であった。「古風」の語の最初の用例は、承安三年（一一七三）の『三井寺新羅社歌合』の「詞存_シ古風_ヲ、興入_ル幽玄_ニ」（九番・古郷郭公）であり、以後はほぼ「古風」で徹している。¹⁾

【表1】歌合判詞における「古風」の使用状況と、そこで踏まえられた万葉歌の抄出状況

催行日時	歌合名	判者	歌番号	勝負	作者	踏まえられた万葉歌	踏まえられた複数の万葉歌に見える表現	古来風抄	廣瀬本摘出語	万物類和歌抄	万葉集佳詞	和歌初学抄「古歌集所名」	
承安三年(1173)八月一五日夜	三井寺新羅社歌合	俊成	17	持	中納言君	7-一四一七		×	×	×	×	×	
治承二年(1178)三月一五日夜	別雷社歌合	俊成	16	持	殷富門院大輔	1-五四		×	○	○	○	×	
建久三年(1192)～建久四年	六百番歌合	俊成	75	勝	季経	19-四一四八		×	○	○	—	×	
			349	勝	顕昭	3-三三八他	「猶しかずけり」						
			371	持	顕昭	14-三三八六		○	○	○	○	×	
建久六年(1195)正月二〇日	民部卿家歌合	俊成	47	負	殷富門院大輔	14-三四四〇他	「なれも」						
正治二年(1200)後半か	石清水若宮社歌合	通親	71	持	公時	10-一九四一		×	×	×	×	×	
			132	負	寂信	8-一四七〇		×	×	×	×	×	
建仁元年(1201)夜	撰歌合	俊成	84	勝	定家	10-二一三一		×	—	○	○	○	
建仁二年(1202)一〇月～翌年初頭成立	千五百番歌合	季経	2038	持	顕昭	18-四〇一二		×	×	○	×	×	
						19-四一五五		×	○	○	×	×	
		2110	持	季能	15-三六二一		×	×	×	×	×		
		2258	持	公時	10-二二七七		○	—	○	×	○		
建保二年(1214)八月一六日	内裏歌合	定家	99	持	源通具	7-一二六五		×	×	×	×	○	
建保五年(1217)一一月四日	冬題歌合	衆議判・家隆発言	1	持	順徳院	11-二四七二		×	○	○	○	×	
寛元四年(1246)一二月	春日若宮社歌合	知家	22	持	在氏	7-一〇九五		×	○	○	×	○	
						10-二三四七		×	—	○	○	×	
建長八年(1256)九月一三夜	百番歌合	基家	652	勝	信実	1-五一		×	○	○	○	×	
						(7-一三九二)		×	○	○	○	×	
		知家	689	負	伊平	(7-一三九六)		×	×	×	×	×	
						(11-二七八〇)		×	×	×	×	×	
行家	897	負	伊平	2-一二五		×	○	○	○	×			
	1111	勝	顕朝	10-一九六六		×	×	×	×	×			
応安五年(1372)以前	三十番歌合	頼阿	37	勝	左須	2-一三三		×	○	○	○	×	
嘉吉三年(1443)	前摂政家歌合	衆議判・兼良執筆	99	勝	兼良	3-三七五		×	○	○	○	×	
文安三年(1446)	詩歌合	兼良	8	勝	持純	11-一九六六		×	×	×	×	×	
			8	勝	雅親	6-九七〇		×	○	○	○	×	
宝徳二年(1450)	仙洞歌合	兼良	43	持	浄空	4-五七五		×	○	○	○	○	
文明十六年(1484)十二月	歌合	衆議判・雅親執筆	23	勝	義尚	2-二〇七他	「わぎもこが」						
						(5-八一〇)		○	×	×	×	×	
			42	負	親長	(12-二八九七)		×	×	×	×	×	
			79	負	義尚	8-一四三一		×	×	○	×	×	
			80	勝	実隆	1-三六他	「見れどあかぬかも」						
			89	負	宗伊	10-二一〇一他	「月人男」						
			112	持	実隆	8-一四四一		×	×	○	○	×	
			114	勝	為広	8-一四二八		×	×	×	×	○	
			129	持	後土御門院	1-七三他	「～なゆめ」						
			130	持	為広	9-一六八六		×	○	○	○	○	
						(11-二六八五)		×	×	×	×	×	
			145	勝	宏行	(12-三〇五六)		×	△	○	—	○	
			156	持	通秀	4-五九一他	「夢にし見ゆる」						
166	持	実淳	3-二六〇他	「こぎこし舟」									
			(19-四一五二)		×	○	○	—	×				
			(20-四四八七)		×	×	×	×	×				

0.081 0.515 0.611 0.455 0.222

○有 ×無 △調の肩に墨の合点有 —本文欠陥

最初の用例から約二〇年後の建久年間に成った『六百番歌合』での用例を見たい。題は「秋雨」である。

六番 左持 顯昭

小雨ふる葛飾早稲を茹るまに民の袖さへうるほひに
けり

右 寂蓮

小萩咲く片山蔭に日ぐらしのなきすさみたる村雨の空
左右不難申

判云、両方の風体、各優には見え待るにとりて、左は殊に古風を存したるを、中五字、「まま」の詞や弱く侍らん。「茹るなへに」などや申すべかりけん。右は、終はりに「村雨の空」と言ひはてたる、優なるべし。但、左も、「民の袖さへ」と言へる心、宜しく聞こゆ。準へて持とすべし。(三七一、三七二)

『万葉集』の相聞の歌、

鳩鳥の葛飾早稲を贅すともそのかなしきを外に立てめ
やも (巻十四・相聞・下総国歌・三三八六)

を本歌とする、左方顕昭の歌を俊成は、「殊に古風を存したる」として評価した。これは『古今和歌集』真名序(以下「真名序」と略す)の、

及_ヒ彼_下時_二変_リ澆_ニ灘_一、人_ノ貴_フ奢_ニ淫_ヲ上_一、浮詞雲)

ゴトクニ興_リ、艶流泉ノゴトクニ湧_キ、其ノ実皆落_チ其ノ華孤_リ栄_ユ。至_ル有_ル下_ニ好色之家以_チテ此_ヲ為_シニ花鳥之使_ト、乞食之客、以_チテ此_ヲ為_スコト中活計之謀_ト。故_ニ半_バ為_リ二婦人之右_ト、難_シ進_ムルコト二大夫之前_ニ。近代_ニ存_ス古風_一者、纒_{カニ}二三人。

に基づく措辞である。「存」については、『和名抄』に見える「のこす」の訓に従った。俊成は第三句の「まま(に)」「は弱く、「なへに」などとすべきだった、とする。「ままに」が上にくる語の動作や状態に追隨して次の行動がなされることを表すのに対して、俊成の改作案である「なへに」は、『万葉集』及び三代集時代の用例がほとんどで、その後一時衰退した古語である。

八隅_{ヤスミ}知_シわが大王_{オホキミ}の高_{タカ}く照_テる 聖_{ヒジリ}の皇子_{ミコ}は
荒_{オホ}たへ_ニ 藤原_{フジワラ}が上_{ウヘ}に 食_タ国_{クニ}を 召_よし給_ハはむと 都_{ミヤ}をば
高_{タカ}知_ルるらむと 神_{カミ}ながら 思_{おも}ふらむなへに 天地_{アマツチ}も
縁_よりてあるこそ(下略)

鶯_ウの音_ネ聞_クくなへに梅_{ウメ}の花_{ハナ}吾_ワ家の_{ウチ}園_ノに咲_ハきて散_ちる見_ミゆ
(巻一・五〇・藤原宮之俊民作歌)

足引_{アジヒ}の山河_{ヤマト}の瀬_セのなるなへに弓_{ユミ}月_{ツキ}高_{タカ}く雲_{クモ}立_タちわたる
(巻七・雑歌・詠_レ雲・一〇八八・柿本人麿歌集所出歌)

というように、『万葉集』の「なへに」は、「ままに」のように時間の経過を含む因果律を表すことはなく、二つの事態の邂逅の瞬間の感動を表す。顕昭の歌は、「小雨の中、葛飾早稲を茹るにつれて民の袖も濡れ、やがてその贅によって民の暮らしまでも潤った」と解釈できる。因果律に縛られ、感動は「弱く」なっている。「なへに」に変えることで、「小雨」「うるほふ」の縁語も、「葛飾早稲」の「古風」も感動の表現として生きる。

その他の『六百番歌合』の顕昭の万葉撰取歌に対しては皮肉めいた批評もしている。

入り日さす豊旗雲もなならず月なき恋の闇し晴れね
ば
（七番・寄雲恋・左・負・九二三・顕昭）
については、

「豊旗雲」などはことごとしくは聞こゆれど、「闇し晴れねば」と言ひはてたる、後干なるべし。

と述べた。「後干」とは、しりすほみ、末が弱くなるさまの意。「入り日さす豊旗雲」を受けて「闇し晴れねば」と結ぶ言葉の趣向は作為的で、言い足りない感がある。

また、
萩が枝をしがらむ鹿も荒かりし風のねたさに猶しかず
けり
（秋上・廿五番・野分・左・勝・三四九・顕昭）

について、俊成は、

判云、左歌「猶しかずけり」など言へる、古風の体
や、と見ゆるを、上句より「風のねたさ」まではただ
近き歌の体なるこそ、布衣の人著靴したらん心地し待
るめれ。

と述べた。一首は萩を荒らす鹿と風の「ねたさ」を比較する趣向である。結句の「猶しかずけり」は『万葉集』に五例見いだせる。

ただに居て語らひするは酒飲みて酔ひ泣きするに猶しかずけり

（卷三・雑歌・大宰帥大伴卿讚^レ酒歌・三五〇・大伴旅人）
隼人の湍門の巖も鮎走る芳野の滝に猶しかずけり

（卷六・雑歌・帥大伴卿遥思^二芳野離宮^一作歌・九六〇・大伴旅人）

咲く花も移ろはざらばおきてあらむ長き心に猶しかず

けり（卷八・秋雑歌・大伴坂上郎女晩芽子歌・一五四八）
梅の花折りも折らずも見つれども今宵の花に猶しかず

けり（卷八・冬雑歌・池田広津娘子梅歌・一六五二）
つるばみの衣解き洗ふ待乳山古人には猶しかずけり

（卷十二・寄物陳思・三〇〇九・作者不詳）
それぞれ称賛・賛美の心を表す。しかし、顕昭の歌のそ

れは、作為の目立つ第四句までの「近き歌の体」によって、言葉がその心をいささか離れて用いられている。

新 日本古典文学大系『六百番歌合』（岩波書店、一九九八年）の注で、山口秋穂氏は、本章の最初に見た三七一番歌への俊成の判詞に関して、「（なへに）を」俊成が好んでいたとは思われないが、『葛飾早稲』などと古風に詠もうとするなら、それに合わせるのがよいとする皮肉めいた批評」（括弧内は稿者注）とされている。しかし俊成は、顕昭の万葉撰取が珍しさを狙っていることを難じ、『葛飾早稲』という万葉語に対応すべき歌の心と姿を求めたのだ、と稿者は考えたい。言い換えれば、言葉を飾る珍しさのために、新旧の歌語の混在を問題視しない顕昭（その考えは当該判への『六百番陳状』での反論に表れている）に対抗する論理として、『古風』という一首の心と姿に関わる語を用いたのである。

二 「古風」と心

次に、俊成の時代に形成された「古風」認識の実例を示したい。

巨瀬山のつらつら椿つらつらに見つつ思ふな巨瀬の春野を

〔『万葉集』・巻一・大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于紀伊国〕

時歌・五四・坂門足人

河上のつらつら椿つらつらに見れどもあかず巨瀬の春

野は

〔『万葉集』・巻一・或本歌・五六・春日藏首老）
「つらつらに」とは熟視するさまを言う。「つらつら椿」は『袖中抄』の顕昭の説が、「つらく椿」は『列々』と書り。つらなる椿と云歟」と万葉の本文に基づく解釈を示す。「巨勢」は、万葉以降早くは俊頼が、

これ聞かん巨勢の狭山の杉が上に雨もしののに俱伎羅鳴くなり

〔散木奇歌集』・夏・二四五・「雨中郭公」）と詠んでいる。「しののに」も「つらつらに」と同じく同音を重ねる副詞であり、万葉語である。また「雨がし、つとりと降り、しきりに俱伎羅（時鳥）が鳴く」という二重の意を表す点も、万葉歌の「つらつら椿つらつらに見」（咲きつらなる椿をじ、と見つめる）に通じる。大胆に言葉を変えつつも、万葉歌の「巨勢山」に対応する心の筋は受け継いでいる。

その後、藤原範兼が、

玉椿緑の色も見えぬまで巨瀬の冬野は雪ふりにけり

〔新勅撰和歌集』・冬・四一六・藤原範兼）

と詠んだ。万葉の「つらつら椿」の春の緑を、冬の白い雪景色の過去の面影とした歌である。

次に、治承二年（一一七八）の『別雷社歌合』の「霞」の題で、殷富門院大輔がこれを詠んだ。俊成判も含め、その番全体を掲げる。

八番 左持

実守

昨日まで雪降りつみしみよしのの春知りがほに今朝は
かすめる

右

大輔

霞たつ巨勢の春野の玉椿つらねもあへずみえみ見え
み

左歌めづらしき節にあらねど、詞続きことなるとが
なく優に侍るべし。右「巨勢の春野の」など言へる
姿、ことに不_レ被_レ二庶幾_セの言葉には見え侍れど、
彼の「つらつら椿つらつらに見れどもあかず巨瀬の
春野は」とか言へる『万葉集』の歌を思へるなる
べし。ひとへに古風を存せるうへに、霞の絶え間絶
え間、つらねもあへぬ、心とどめて見ゆ。よりて又
持とす。

「巨瀬の春野の」の姿は庶幾されない言葉だが、「『万葉集』
の歌を思へる」ゆえに、「ひとへに古風を存せる」とする。
万葉に詠まれた巨瀬の春野の玉椿は霞によって隠されてい
る。それを受けた「つらねもあへず」という第四句は、見

え隠れする玉椿の風景の上に、万葉の「つらつら椿」が咲
き連なる面影を「思へる」趣旨である。また、「見えみ見え
ずみ」という同音を連ねた連用修飾節は、「つらつら」「し
のの」に同じく、巨瀬の山や野に対応する姿と心の有り様
なのかもしれない（俊成の判詞の「絶え間絶え間」という言い
回しも、そのことを意識するか）。そのように万葉歌を強く意
識し、その姿と心を生かそうとする工夫に対し、俊成は「心
とどめて見ゆ」、つまり心引かれるとし、「良き持」とした。
後に俊成は、「駒なめて巨瀬の春野を朝ゆけばをあきが原
に雉子_{きさす}なくなり」（『千五百番歌合』・春四・二四六番・左・負
・四九〇・藤原季能）という歌の万葉撰取について、

左、「巨瀬の春野を」など言へる、『万葉集』など覚えて
優には侍るを、下句こそ何の原と言へるにか侍らむ。
管見の物読みにだにえ読み解かず侍れ。『万葉集』にも、
巨瀬の山・野に「つらつら椿」などは言へるやうに覚
え侍り。（中略）「おほかたは『万葉集』にもをかしき
やうなることを取り詠ずるなり」とぞ、古き者も申し
侍るべし。「巨勢の春野」もしひて希_{こひねが}ふべきにはあ
らざるにや。

と、「をかしきやうなること」（傍線部）ではないとした。「巨
瀬の春野を」を万葉歌を思わせる「優」なる句としつつ、

その「巨瀬の春野」も、このように単に珍し、さのために詠むのなら、無理に求め詠むべきではない、としている。傍線部の言葉を語った「古き者」はその師藤原基俊を指す可能性が高い。次節では評語「古風」の先蹤として、やはり「真名序」に基づく、基俊の「古質」の用例を取り上げたい。

三 基俊の「古質」

基俊は、元永元年（一一一八）一〇月二日の『内大臣家歌合』で、

真袖もて朝置く霜を払ふかなあへず移ふ菊の惜さに

（一番・残菊・左・負・二七・藤原顕国）

という歌に対する判詞に、

左歌は、姿歌めきて侍れども、「真袖もて」ぞいと詠ままほしき詞とも覚えぬ。また古の『万葉集』にも侍るめり。これさればにや、古今の序には、「見ルニ上古」歌ヲ、多ク存シニ古質之語ヲ、未ダレ為ニ耳目之翫ト、徒タニ為スニ教戒之端ト」とぞ申したるやうに覚えて侍る。古今、後撰、拾遺并に中比の歌合に、この詞詠みたりとも見えず。あそびにする事とは皆見侍るめり。此袖こそ延喜十二年の歌合にも、「とよむ」とよみて笑はれて講じ侍らずなりにけん心地ぞし侍る。

と述べた。引用される「真名序」は次の波線部である。

至リテハ^レ如キニ^下難波津之^上侍^ヲ献ジ^ニ天皇ニ、富緒川の篇ヲ^中報^セシガ^上太子ニ、或イハ事関^ニ神異ニ、或イハ興入ルニ^幽玄ニ。但シ^見ルニ^上上古^歌ヲ多ク存シ^ニ古質之語ヲ、未ダレ^為ニ^二耳目之翫^ト徒^ヲ為^スニ^二教戒之端^ト。

判詞の傍線部には「真袖もて」を「いと詠ままほしき詞とも覚えぬ」とする。『万葉集』では「真袖もて」もしくは「真袖もち」が次のように詠まれている。

釵^{たち}の後^{しりまや}鞆^もや納野^{いろの}に葛^{かづら}繰^るる吾妹^{わが妹}真袖もて著てむとてかも夏草^{なつぐさ}萌^もるも

（巻七・旋頭歌・柿本朝臣人麿之歌集所出歌・一二七二）
真袖もち床^{ゆか}うちはらひ君待つとをりし間に月傾きぬ

（卷十一・寄物陳思・二六六七）
（上略）若草乃 都麻波等里都吉 平久 和礼波伊波々
牟 好去而 阜還来等 麻蘇渥毛知 奈美太乎能其比
牟世比都々 言語須礼波（下略）

（卷二十・為「防人情」陳「思作歌一首・四三九八」）
両袖で男に衣を着せ、床を払い涙をぬぐう、という所作は、女の男への深い思いを示す。それに対し、顕国の歌の「真袖もて」は、すぐに消えるはずの「朝置く霜」を払う所作であり、菊を惜しむ心は深くなく、季節の歌の趣向に

すぎない。文字囲いをした「あそびにする事」の「あそび」は「真名序」の「耳目之翫」の意味合いである。

二重傍線部の、「延喜十二年の歌合」(正しくは延喜一三年(九一三)三月一三日)で詠まれた「とよむ」の場合も考えてみたい。

片岡のあしたの原をとよむまで山時鳥いまだ鳴くなる
「片岡のあしたの原をとよむまで」とあるを、「とよむ、にくし」と笑はれて末は詠まずして負けぬ。

(亭子院歌合) (十卷本)・夏四月・右・四八・藤原興風
判詞は宇多法皇のものである。「とよむ」の『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』の用例は、それぞれ三五例・四例・一例の計四〇例である。次頁の二つの表にその分析を示した。

【表2】「とよむ」音をたてるもの

ほととぎす	鹿	水	なる神・なく神	雉	雁が音	浪	山彦	鶴
17	9	3	2	2	1	1	1	1

【表3】「とよむ」に伴う感情表現(例えば「恋ふ」と「物思ふ」が一首に重出する場合、それぞれ一つずつ差し引いた数字を括弧内に示す)

恋ふ	物思ふ	悲し	さよばひ	いのねらえぬ	やすしなきぬ	うらびれ	ねたし	さびし
6(5)	2(1)	2(1)	1	1	1	1	1	1(0)

この二つの表から、「ほととぎす」の声、また妻を思つて鳴く「鹿」の声などが鳴り響く意の「とよむ」は、同時に恋・孤独・悲愁などの人の心とも共鳴することがわかる。「片岡の朝の原」は、「霧立ちて雁ぞ鳴くなる——は紅葉しぬらむ」(『古今和歌集』・秋下・二五二・よみ人しらず)、「明日からは若菜摘まむと——は今日ぞ焼くめる」(『拾遺和歌集』・春・一八・柿本人麻呂)など、紅葉・野焼き・若菜摘みなどの視覚的印象を伝統とする歌枕であった。「片岡の朝の原」の視覚的な趣向と、「とよむ」という人の心に関わる音の表現の間のずれは、滑稽なまでに大きかったのである。

第二節でも見たように、俊成はしばしば万葉撰取に關して先人(古き者へ人)「故人」の教えを祖述した。それは「よく心を得て」「優なる」「をかしき」ことを取るべし、というものであり、如上の基俊の判詞はその教説の実践例に当たる。右に見た例に關連して言えば、「真袖」を俊成は、

紫の根はふ横野のつば萐真袖につまむ色もむつまし

(久安百首)・春・八〇八・藤原俊成

と詠み、萐への愛着を「真袖」の語で表している。また、「と

よむ」を用いた、

雨後山水

吉野川そそや村雨ふりぬらし岩間にたぎつ音とよむなり
〔基俊集〕・二四

いかだとよむ瀬々の岩間の波の音にいくよなれたる浮
き寝なるらむ
〔秋篠月清集〕・一四六〇

という歌には、大自然の音に厳肅さを感じ、岩間の波の音に旅の孤愁を思う人の心が詠まれ、音が人の心に共鳴する関係を認め得る。俊成自身には用例がないが、『六百番歌合』の「蛙」の題で、家房の歌、

漕ぎすぐる船さへとよむ心地して堀江のかはづ声しき
るなり
〔春・甘番・右・勝・一六〇〕

について、左方の有家が、「かはづの声あまりにや」と陳じたのに対し、俊成は、「右は、かはづの声あまりなる由もさる事には侍れど、堀江のかはづはさも聞こえ侍らん」とし、右を勝とした。「とよむ」の表す上代人の音の感性は、基俊・俊成を介して新古今時代に再生されたのである。

しかし、「真袖もて」に対する「いと詠まほしき詞とも覚えぬ」、「とよむ」に対する「笑はれて講じ侍らずなりにけん」という言い方が、基俊の万葉語を使用することに對する否定的見方を示していることも事実である。そこには

万葉語の心の深さを認めつつも、歌合という晴の場にはなおふさわしくない、との考えがあるのではないか。

四 俊成の万葉観

俊成独自の万葉観としては、次のような説が挙げられる。

あをによし平城の帝の御時撰ひおかれたる『万葉集』は、世もあがり人の心も及び難ければ、しばらくおく。

〔御裳濯河歌合〕・一番

上古の歌は、^①わざと姿を飾り詞を磨かむとせざれども、世もあがり^②人の心も素直にして、ただ詞にまかせて言ひ出だせれども、心も深く姿も高く聞こゆるなるべし。

〔古来風躰抄〕上

猶中古の歌は万葉の心に及び難かるべし。

〔千五百番歌合〕・百六十七番・春三

上古の歌は人の心も素直で、心も深く姿も高く、その心にはいまの人も中古の歌も及び難い、とする。傍線部^①は「真名序」の「耳目之翫」と対立関係にあり、傍線部^②は「真名序」の「警戒之端」に相当するのではないか。ただし、その影響は「真名序」から直接受けたものというよりも、「真名序」の背景にある、あるいはその影響下にある一般的認識から間接的に受けたものと見るべきか、と思われる。そ

の認識の一例として、「古風」に類する言葉である『源氏物語』の「古代」について考えたい。

五 『源氏物語』の「古代」

まず、『源氏物語』の末摘花に関わる場面での「古代」とそれに類する「古めかし」の用例を引きたい。⁽⁵⁾

A 古代の故づきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御装ひには似げなうおどろおどろしきこと、いとめてはやされたり。

(末摘花)

B いたう恥じらひて、口覆ひしたるさへひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もち覚えて、さすがにうち笑み給へる気色、はしたなうすするびたり。

(末摘花)

C 御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様にて麗しきを(中略)例の女ばら、「いかがはせん。そこそは世の常のこと」とて、取り紛らはしつづ、目に近き今日明日の見苦しさを繕はんとする時もあるを、いみじう諫め給ひて、「見よと思ひ給ひてこそしおかせ給ひけぬ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあらはれること」とのたまひて、さるわざはせさせ給はず。

(蓬生)

今様の「若やかなる」「軽々し」「うち笑み給へる気色」と、「古代」の「故づきたる」「おどろおどろし」「ことごとしく」「儀式官」が対比されている。

また、

着てみれば恨みられけり唐衣返しやりてん袖を濡らして
という末摘花の歌を、源氏は、

D 古代の歌詠みは、「唐衣」「袂濡るる」かごとこそ離れねな。まろもその列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、いまめきたる言の葉にゆるぎ給はぬこそ妬きことははたあれ。

(玉鬘)

と酷評した。「いまめきたる言の葉」を一顧だにせず古語に拘ることはいまましい態度であった。『源氏物語』の「古代」の特質は末摘花への評に顕著な「麗し」の語に集約されている。Cの「御調度どもも、いと古代に馴れたるが昔様に麗しきを」の他、

E 麗しき紙屋紙、陸奥紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどはいとすさまじげなるを、せめてながめ給ふ折々は、引き広げ給ふ。今の世の人のすめる経うち誦み、行ひなどいふことはいと恥づかし給ひて、見奉る人もなければ、数珠など取り寄せ給はず。かやうに麗しくぞものし給ひける。

(蓬生)

F 末摘花、東の院におはすれば、いま少しさし離れ、
艶なるべきを、麗しくものし給ふ人にて、あるべきこと
は違へ給はず。
(玉鬘)

G 常陸の宮の御方、あやしうもの麗しう、さるべきこ
との折過ぐさぬ古代の御心にて(下略)
(行幸)

といった例がある。使い馴れた家具や紙屋紙のきちんと整
っている様(CE)、誠実で几帳面な人柄(FG)について
言っている。

第四節に引いた『古来風躰抄』の傍線部①「わざと姿を
飾り詞を磨かむとせざれ」は、Cの「古代に馴れたる」に
通じるのではないだろうか。『源氏物語』の「古代」に言
及する文脈における「麗し」は、Fにいう「艶なる」のよ
うに目立つ部分こそないが、礼儀・作法等の面では難や咎
のない物事の性質や人柄を表している。俊成が歌合判詞に
用いた「麗し」もこれに類する。その特徴は、以下の七つ
の全用例に明らかである。

① 難とすべき所なく、歌合の歌と見えたり(中略)か
れは心麗し。
(『中宮亮重家朝臣歌合』・十番・月)

② 「風に乱るる音さえて」など言へる姿、歌合の歌と
覚えていとをかしくこそ侍めれ。(中略)左麗しく難無
く侍らんにとりては(下略)〔『広田社歌合』・一番・社頭雪〕

③ 左歌麗しく下りてさせる咎なく侍り。(中略)深き
難にはあらねど、左麗しく侍れば(下略)
(同・八番・社頭雪)

④ 左歌文字続き麗しく下りて(中略)歌合のときは姿
を先とし、難を除く事なれば(下略)
(同・十二番・海上眺望)

⑤ 左の歌、麗しくたけ高く見ゆ。(中略)左、ことも
なく麗し。
(『御裳濯河歌合』・三番)

⑥ 右麗しく無為には侍るにや。歌合の習ひ、勝るべく
や侍らむ。
(『千五百番歌合』・春四・二百二十九番)

⑦ 右歌、心麗しく、咎なくは見え侍るを(下略)
(『千五百番歌合』・春四・二百四十三番)

⑤⑥は飾るところのないこと、その他は難や咎のないこ
との指摘がある。これらの「麗し」は「歌合の歌」①②、
「歌合のときは」④、「歌合の習ひ」⑥と言っているよ
うに、歌合という晴れの場にふさわしい特質であった。但
し、「麗し」は負の意味を持つこともある。「古代の歌詠み」
である末摘花の歌への源氏の評(D)に続く部分に、

よく案内知り給へる人の口つきにては、目馴れてこそ
あれ。
(玉鬘)

とある。これは次に掲げる俊成・定家が「麗し」としつつ

負とした歌への判詞に似通う。ともに『千五百番歌合』の例である。

草も木もいかに契りて藤の花松にとしもはかかりそめ

けむ (春四・二百四十三番・右・負・四八五・藤原兼宗)

▽心麗しく、とがなくては見え侍るを、藤の松にかかれる心、さしても覚え侍らねど、聞き馴れて、や侍らむ。

(俊成判)

鐘の声鳴の羽音もあはれなり野寺の霧の明け方の空

(秋四・七百五十七番・右・負・一五二三・藤原家隆)

▽麗しく言ひくだしては侍れど、又かやうの心常のことにや。鳴の羽音も耳、馴れ (下略) (定家判)

このように俊成の判詞における「麗し」の「馴れ」という特質は、『源氏物語』の「古代」と共通し、顕昭らの庶幾する珍しい風体のあり方に対立している。

六 「麗し」と「古風」

和歌の評語「麗し」がどのような歌に対して用いられているかを、俊成・定家が歌合判で「麗し」とし、かつ勝とした歌について見たい。出典表記は注に示す。⁶ 次の1から8が俊成、9・10が定家の評価した歌である。一部分が「麗し」とされたものは該当箇所を傍線で示し、別の言葉で評

されている箇所は括弧に入れる。前節に掲げた①から⑦の判詞との対応を歌の末尾に示す。

1 木綿かくる心地こそすれ住吉の松の梢を照らす月影

2 今宵もあやにくに降る時雨かなまばらにさせる柴

の廬に

3 木綿ゆふしで四手の風に乱るる音さえて庭白妙に雪ぞ積れる

4 雪降れば神のしるしやこれならん白木綿しらゆふかけぬ榊葉

ぞなき
5 遙々と御前の沖を見渡せば (雲居にまがふ海士の釣船)

6 昼とのみ思ひはつべき月影をあらはし顔に (鳴ぞ羽は掻く)

7 おしなべて花の盛りに成りにけり山の端ごとにかか
る白雲

8 ながむればたなびく雲の絶え間より心細くも帰る雁
かな

9 神無月今朝は梢に秋過ぎて庭に紅葉の色を見るかな

10 見ぬ人に秋の名残をしのべとや枯野にさゆる冬の夜
の月

縁語・掛詞を用いたものは一首もなく、技巧としては見

立てが1(木綿―月影)・4(雪―白木綿)・7(花―白雲)の三首に見られる程度である。その見立てもいずれも伝統的なものである。7が⑤に「こともなく」、8が⑥に「無為」とされたように、平凡でありながら心の深いことを特質とする。具体的に言おう。2の「まばらにさせる」を俊成は、『まばらにさせる』など言へるわたり、麗しく聞こゆ」と評価した。『住吉社歌合』での詠であるが、番われた右方の田実の歌、

草枕露けき旅のくれはとりあやにくにまた時雨ふるなり

との違いを、俊成は次のように述べる。

左右の時雨、ともにあやにくに降れるにとりて、右歌は「くれはとり」とおきて「あやにくに」と続けたる、をかしくは聞こゆるを、「露けき旅」といひて「くれはとり」といへるほど、俄に思ひがけぬ心地やすらむ。左は、「くれはとり」離れたる「あや」は、ことなることとはなけれど、「まばらにさせる」など言へるわたり、麗しく聞こゆ。

「ことなることはなけれど…麗しく聞こゆ」という論法は、第四節に引いた『古来風躰抄』のそれに類似するのではないだろうか。言葉が縁語を用いずとも、かつちりと文脈の

中に収まっている。それは人物の儀礼的所作にも重なる。次に掲げる表の中の項目に傍線を付して示したように、「真名序」、『源氏物語』、藤原俊成の上古の認識に共通するものとして、晴儀性がある。

	「真名序」	上古	中古以降
	・教戒の端 ・古質 ・古風 ・実 ・大夫の前に進む	・浮詞 ・艶流 ・華 ・婦人の右と為す	
「源氏物語」	・古代 ・ことごとし ・おどろおどろし ・故づきたる ・儀式官 ・麗し	・今めく ・軽々し ・飾り ・若やか	
藤原俊成	・古風の体 ・著靴 ・万葉の心 ・ことごとし・わざと姿を飾り詞を磨かむとす ・人の心も素直にして、ただ詞にまかせて言ひ出だせれども、心も深く姿も高し	・近き歌の体 ・布衣 ・中古の歌	

それに対して、基俊の「古質」に対する捉え方はやや異

なる。かれは前出の『内大臣家歌合』の判詞で、

尋ぬるも尋ぬる限りありければ神にぞ祈る夢に見るが
に (四番・尋失恋・右・負・藤原師俊)

という歌に対し、

果ての「がに」いとにくし。などか、「夢に見ゆや」と
はいはざらん。「がに」などは古き歌にあるを見ては、
「さはかうも詠むべきにや」と愚か心を得て詠めるに
や。あれは麗しう言へば、心違ふ様なる折にわびて置
くなり。束帯したる人の藁杵と申す物穿きたらん心地
ぞする。

と述べた。しかし、「がに」という万葉以来の古語は、古今
集時代まで、

かき曇り霰降り敷け白玉を敷ける庭とも人の見るがに
〔寛平御時后宮歌合〕・冬・二十番・左・一一九、〔後撰和歌
集〕冬部に入集

山里に知る人もがな時鳥なきぬと聞かばつげも来るが
に

〔亭子院歌合〕・夏四月・左・持・四三・藤原興風、〔拾遺和
歌集〕夏部に作者紀貫之として入集

と、晴れの場である歌合で詠まれ、その歌は勅撰集に入集
した。波線部の、「がに」を「藁杵」にたとえる比喩は、第

一節で見た万葉の「猶しかずけり」を「著靴」にたとえる
俊成の比喩とは逆である。俊成は、『源氏物語』の用法に重
なる「麗し」を、「真名序」を典拠として和歌の晴儀性に結
びつけた。そして、その「麗し」を論ずる際と同じ、逆接
の「ども」を用いた弁証法的論理によって、「万葉の古風」
を論じた。つまり、「古風」の特性は「麗し」のそれに重な
るのである。

おわりに

鴨長明『無名抄』の「近代古体」は、「幽玄の体」につい
て、「ここに今の人、歌の様、世々に詠み古されにける事を
知りて、さらに古風に帰りて幽玄の体を学ぶことの出で来
たるなり」とした上で、次のように述べる。

いはむや幽玄の体、まづ名を聞くより惑ひぬべし。自
らもいと心得ぬ事なれば、定かにいかに申べしとも覺
え侍らぬを、よく境に入れる人の申されし趣は、詮は
ただ詞に表れぬ余情、姿に見えぬ気色なるべし。心に
も理深く、詞にも艶極まりぬれば、これらの徳はおの
づから備はるにこそ。例へば、秋の夕暮の空の気色は、
色もなく声もなし。いづくにいかなる故あるべしとも
覚えねど、すすろに涙の零るるがごとし。(中略)又、

よき女の恨めしき事あれば、詞にも表さず、深く忍びたるは、詞を尽くして恨み、袖を絞りに見せむよりも、心苦しうあはれ深かるべきがごとし。(中略)又、幼き子のらうたきが、片言してそこもなき聞こえぬ、事言ひ居たるは、はかなきにつけてもいとほしく、聞き所あるに似たる事も侍にや。(中略)又、霧の絶え間より秋の山を眺むれば、見ゆる所はほのかなれど奥ゆかしく、いかばかり紅葉渡りて面白からんと、限りも「なく」推しはからるる面影は、ほとほと定かに見むにも優れたるべし。

このように新古今時代における「古風」は、「余情」「気色(景気とも)」を特徴とする「幽玄之体」と密接に結びついていた。傍点を付したように、ここには否定や逆接を特徴とする弁証法的論理が見える。

『広田社歌合』で俊成は、

葛城からきや菅すがの葉しのぎ入りぬとも憂き名はなほや世にと
まりなん (廿八番・述懐・右・持・一七二・淨縁)

という歌に対して、

「菅の葉しのぎ」など言へる姿、幽玄にこそ聞こえ侍れ。と述べた。

奥山の菅の葉しのぎふる雪の消なばはた惜し雨な降り

来そ

〔『万葉集』・卷三・雑歌・二九九・大納言大伴卿(大伴安麻呂か)〕

奥山の真木の葉しのぎふる雪の降りはますとも土に落ちめやは

〔『万葉集』・卷六・雑歌・二〇一〇・橘奈良麿〕

高山の菅の葉しのぎ降る雪の消ぬかといふも恋のしげけく〔『万葉集』・卷八・冬相聞・一六五五・三国真人足という万葉の「::の葉しのぎ」の用例は、いずれも絶え間なく降る雪を詠む。淨縁の歌の「菅の葉しのぎ」は山へ分け入る心の他に、降りしきる雪の「しのぐ」(押さえつける)菅の葉がなびきしおれる「姿に見えぬ気色」を表し、それが下句の述懐の気分に響いている。「しのぐ」の「の」は甲類で、「しのに」「しのの」の「しの」と同根であり、「草などがなびき、しおれるさま」の他動詞化したものである。俊成が「菅の葉しのぎ」を「幽玄」としたことは、それが後に、顕昭との論争において、「しのぐ」と同根の副詞「しのに」の意味にこだわったことと呼応する主張である。「余情」「気色」とは、「わざと姿を飾り、詞を磨かむとせざれども」、自ずと感じられる心の深さ、姿の高さであった(『古来風躰抄』)。「自然之理」(「真名序」)に近い、始原的な

(3) 心が万葉の古語には対応すべきである、との、心と言葉の一体性への認識が、俊成の「万葉の古風」の主張の背景にあると言えるだろう。

【本文一覽】和歌の引用は特に注記の無い限り、『新編国歌大観』に拠る。その他は以下の通り。『万葉集』（広瀬本・新增補版）校本萬葉集（岩波書店）別冊、『類聚古集』・龍谷大学善本叢書『類聚古集』（思文閣出版）、『万葉集』（元暦校本）・『元暦校本萬葉集』（勉誠社）、『古今和歌集』真名序・小島憲之・新井榮蔵校注、新日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）、『亭子院歌合』・『平安朝歌合大成』『新訂増補』（同朋社出版）、『源氏物語』・新日本古典文学大系『源氏物語』（小学館）、『袖中抄』・『日本歌学大系』別巻二（風間書房）、『古来風脉抄』『無名抄』・『歌論歌学集成』第七卷（三弥井書店、二〇〇六年）。但し私意に表記を改めた箇所がある。

【注】

(1) 例外は「万葉集の風情」〔『六百番歌合』・冬・廿二番・余〕のみ。

(2) 早―早（類聚古集）、元暦校本）

(3) 仙覚の新点以前には、訓が見えない長歌である。参考までに西本願寺本の訓を掲げる。「(上略) 若草の 妻はとりつき 平らけく 我は祝はむ よしゆきて はや還り来と

真袖もち 涙をのこひ むせびつつ 語らひすれば(下略)」

(4) 「古き名歌も、よく取りなしつるはをかしきこと」(中宮亮重家朝臣家歌合・五番・花)、『万葉集』などの歌、殊に優なる事を歌合には取りいづべき事」(右大臣家歌合・十六番・雪)、『万葉集』は優なることを取るべきなり」(『六百番歌合』・春・五番・元日宴)、『万葉集』の歌はよく心を得て取りても詠むべき」(『古来風脉抄』上)、「おほかたは『万葉集』にもをかしきやうなることを取り詠するなり」(『千五百番歌合』・二百四十六番・春四)

(5) 藤原克己「古風なる人々」(『むらさき』・第十六号、一九七九年六月)は、『源氏物語』の「古代」と皇族の密接な関わりを指摘される。

(6) 1 『住吉社歌合』・五番・社頭月・左・勝・九・藤原成範／2同・十七番・旅宿時雨・左・勝・八三・藤原公重／3 『広田社歌合』・一番・社頭雪・左・勝・一・藤原公通／4同・八番・社頭雪・左・勝・一五・藤原成範／5同・十二番・海上眺望・左・勝・八一・藤原頼美／6 『民部卿家歌合』・十五番・暁月・右・勝・一二二・藤原有経／7 『御裳濯河

歌合』・三番・左・勝・五／8 『千五百番歌合』・二二九番
・春四・右・勝・四五八・藤原兼宗／9 同・八百三十四番
・冬一・右・勝・一六六七・藤原兼宗／10 同・八百九十一
番・冬一・右・勝・一七八一・源通光

(7) 西宮一民『萬葉集全注』(有斐閣、昭和五九年)に拠る。例
えば、「秋の穂をしのおしなみ置く露の消かも死なまし恋
ひつつあらずは」(『万葉集』・卷十・秋相聞・寄露・二二
五六、『古来風躰抄』に拠る)の「しのに」は「…の葉しのぎ」
と同じような景を表す。

(8) 渡部泰明氏は「しのに」の俊成の用例を挙げた上で、「これ
らは可能性としての『しのに』の意味・イメージの総和を
記述してみたのである。それぞれは条件次第で顕在化した

り、ある時は密やかな形で意味・イメージの生成に参与す
る」(傍点、稿者)とされた(藤原俊成の〈縁語的思考〉
―「しのに」をめぐって―)〔『國語と國文学』・第八十一卷
五号、平成一六年五月〕。

(9) 「かの『万葉集』は歌の源なり。時移り事隔たりていまの人
知る事難し」(『新古今和歌集』序)。

(付記) 本論文は二〇一〇年二月一九日和歌文学会例会(於、
日本大学文理学部)での発表に基づいています。ご指導頂いた先
生方にこの場をお借りして、篤く御礼申し上げます。なお、本論
文は日本学術振興会特別研究員奨励費の助成による成果の一部で
す。